もしもの世界線

情報屋迅龍牙

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

短編に変えての投稿となります。

目次

もしもの世界線 ―――― 1

もしもの世界線

もしも・・・二人の・・・いや、衛宮士郎とセイバー　：　アルトリア・ペンドラゴンの関係が反転した世界があったら?どうなっていただろうか?

私は、この世界の理を超えてしまったのだろうか?否、断じて否である。理とは、世界の絶対的ルールである。それを超えることは、人であるにみでは、決して叶わない・・・だが、今、私の目の前にいるこの『英霊』は、どこか、懐かしく、そして、とても、愛おしい・・・

【問おう、貴方が私のマスターか?】

数時間前　：衛宮家一室

「ん・・・?夢?」

私は、とても現実的な夢を見た、いつかの世界、その世界のどこかで、あったことのある、あの青年・・・

「考えても、仕方ありませんね」

着替えて、朝食を作らねばなりませんね？

ドタドタドタドタドタ

「はぁ、今日は昨日にもまして早いですね・・・」

がら！

「リアちゃぁぁぁん！おっはよぉぉぉぉ！」〉ガシ＜

「あの、着替えるのに邪魔なんですが？タイガ・・・」

「ん～、相変わらず白くて柔らかい肌よねぇ～」

この人は、藤村大河、時折家に来るお節介さん？正直私もわかっていません。

私ですか？私は、衛宮璃亜。本名は、アルトリア・ペンドラゴンと言いますが、お爺様（衛宮切嗣）に引き取られる際、名前をアルトリア・ペンドラゴンから、衛宮璃亜に変え、養子になりました。

「朝食を作らねばなりませんので、離してもらえるでしょうか？」

「い～や～だ～」

「朝食抜きにしますよ？」

「ご、ご勘弁を!?」
「分かればいいんです」
　数時間後　：衛宮家台所
「今日は、スクランブルエッグですかね・・・・」
　大河がひっついて離れてくれませんでしたから、時間があまりなかったです。
「璃亜ちゃ～んまだ～？」
「全く、大河は・・・」
　７　：　３０
「な!?大河！申し訳ありませんが、あとはご自分でお願いします！」
「え!?ちょ!?璃亜ちゃん!?」
「部活の朝練があるのを忘れていましたので！」
「行っちゃった・・・」
　衛宮家　：正門
「見つけたぜ・・・嬢ちゃん」
「ッ!?いない？たしかに今、男性がいたような」

穂群原学園　：剣道部部室

「すみません！遅れてしまいました！」

「璃亜さん、今日はどうしたのです？珍しく遅刻じゃないですか」

「すみません、ちょっと所用で」

この方は剣道部顧問、軍畑剣心先生。高校時代は世界覇者として名を連ねた方だ。

「もしや？大河さんですかな？」

この人に隠し事はできないようだ・・・と、常常思い知らされるのであった。

数時間後　：三年一組

「おやおや？今日はやけにお疲れじゃありませんか？璃亜さん？」

「凛・・・」

「大方、大河さんでしょうけどね？」

彼女にも隠し事はできないようだ・・・・

「ん？凛、目の下にクマがありますが？」

「あぁ、ちょっと寝不足でね」

体を壊さなければ良いのですが・・・・

放課後　：衛宮家付近

「・・・・」

誰かに付けられている？もうすぐ家なのですが、どうしたものでしょう・・・・

「嬢ちゃん、警戒を怠ったな？」

「な!?」Σビクッ!?

「くっ!!」

「おいおい、逃げても無駄だぜ？嬢ちゃん？」

「きゃ!?」

「おっと？ちょっと飛ばしすぎちまったか？」

くぅ・・・なんて槍さばき・・・あんなの人間技じゃありません・・・・一体、どうしたら・・・・

【身体は剣でできている】

「え？な、なんです？」

「お？こんなとこにいたか」

「ひぅ！」

もう、逃げ場が・・・このままだと、本当に・・・・

【身体は剣で出来ている】
　さっきから聞こえる、この声は・・・・・
【セイバーいつか、また・・・】
「身体は剣で出来ている・・・血潮は鉄で、心はガラス・・・」
「あ?なんだそりゃ?」
「幾度の戦場を超え、不敗・・・たった一度の敗北もなく・・・たった一度の勝利もなしに、担い手は1人、剣の丘で・・・」
「はぁ、終わりだな?マスターの命令もあるしよ?じゃあな、嬢ちゃん」
「鉄を打つ、けれど!その生涯に意味はいらず!この身体は!無限の剣でできていた!」
「なんだとぉ!?」
　な、なにがおきて・・・・・
「召喚に従い参上した・・・」
「そして、貴様はどいていろ、ケルトの英雄」
「なに!?うぉ!?」
「そうか・・・ならば、こう言うべきか」

　私は、この世界の理を超えてしまったのだろうか?否、断じて否である。理とは、世

界の絶対的ルールである。それを超えることは、人である身では、決して叶わない・・・だが、今、私の目の前にいるこの『英霊』は、どこか、懐かしく、そして、とても、愛おしい・・・

「問おう、貴方が私の、マスターか？」

そして私は出会った。夢の中で見たあの青年、サーヴァントセイバー　：　千子村正（衛宮士郎）に・・・・出会ったのだった。